2011年度 政治経済学

小倉利丸

ogura@eco.u-toyama.ac.jp *

2012年1月12日

12 資本蓄積

12.1 概観

前回まで主として、生産過程の機械化がどのような経済的な要因によって促進されるのか、機械化 = 近代化 = 経済進歩という社会通念には裏側があり、近代社会の進歩が同時に社会の貧困や経済的な困難の原因とならざるをえない側面を指摘した。

今回は、成長の基本となる資本蓄積について論ずる。論点は二つ。ひとつは、資本蓄積とはどのようなことを指すのか、その基本的なメカニズムを説明する。この説明には二つの側面がある。ひとつは、個々の資本が資本蓄積を行うメカニズムと、社会全体が資本蓄積のメカニズムをどのように維持・再生産するのか、という点である。もう一つは、資本主義の神話ともいべき立身出世の物語についてである。資本の創業者は努力して資金を集め苦勞して会社を立ち上げ大きくしてきた、会社の成長（資本蓄積）はこうした創業者の努力（労働）の結果である、という物語は、資本蓄積の構造をふまえると、ある種の「神話」でしかない、ということである。この講義で繰り返し指摘してきたように、経済は人々の労働によって維持されている。創業者の努力がすべてではなく、資本蓄積に果たす人々（労働者と言い換えてもよい）の役割を説明する。

これらの説明に入る前に、前回までに説明してきた剰余価値の形成に関連して一つだけ重要な補足説明を加える。前回までの説明では、剰余価値が個々の資本によって形成されること、そしてこの剰余価値の形成は労働者の剰余労働に基づくという点に限った説明をした。しかし、この説明では不十分な点がある。それは、社会全体での剰余の分配という問題である。この点をまず説明しておく。

12.2 剰余価値の社会的形成と分配

剰余価値は、労働者の剰余労働によって形成される。このことは、いくつかの問題を引き起こす。

1. 労働者の剰余労働は、他の条件が等しいとすれば、より多くの労働者を雇用する資本ほどより多くの剰余労働を取得することができ、したがって、より多くの利潤を得ることができる、ということになる。もしそうならば、労働者の雇用を節約して機械化へと向かうことは、剰余労働の源泉である労働者を機

* 携帯 070-5553-5495

械に置き換えてしまうことになり、剰余労働 = 剰余価値の取得に反するように見える。しかし、現実には、機械化 = 省力化が資本主義の基本的な方向を定めている。機械化は、最新の機械が普及する前までは、導入した資本には特別剰余価値を取得できるとはいえ、機械化の普及にともなって、最終的には生産物 1 単位あたりの雇用労働者が減れば、剰余労働の形成も減少する。経験的直感に従えば（これが「正しい」認識かどうかは別問題だ）、こうした剰余労働と資本の利潤との関係は現実とは反するように見える。

2. 労働者の雇用は、産業によって（商品の使用価値的な特性によって）大きく異なる。これは、技術的な差異に基づく出来事である。いわゆる「労働集約型」産業と「資本集約型」産業を比較したとき、前者の方が多くの剰余労働を形成するから、価値どおりの交換であれば、その利潤も多くなるはずだ。もし、そうであるなら、「資本集約型」産業に投資するよりは「労働集約型」産業に投資したほうが有利であることは、明白である。しかし、現実には、このような産業別の雇用労働者数に比例した利潤の差異はみられない。
3. 剰余労働のわかりやすい例として挙げられていた事例はいずれも物の生産のケースばかりだ。流通では剰余労働はどのような役割を果たすのか。また、労働者が集団で組織として労働する場合、労働者に対する指揮監督や、資本の組織管理、経理事務などの労働では剰余労働はどのような評価になるのか。

これらは、労働価値説が提唱された初期の頃からよく知られている問題であり、経済が人々の労働によって成り立っていること、そして、労働と市場経済のメカニズム（その中心をなすのが価格メカニズムであろう）との間にある種の関係性があるという大前提を疑わないとすれば、上記のような問題に何らかの説明を与えることが必要になる。マルクスもこの問題に気づいており、『資本論』第 2 巻、第 3 巻でこの問題に取り組んでいるが、これは、かなり複雑な説明が必要になるので、ここでは、その概略だけを論じることにする。

剰余労働は、市場経済の全体の構造のなかで、価格メカニズムを通じて再配分される。経済活動が人間の活動である限り、人間の活動と人間活動は視野に入れている自然環境以外から富の生成はありえない。価格メカニズムは、資本主義経済の場合、資本の利害を反映するように構築されるので、資本主義以前の市場とはこの点でいくつもの修正が加えられる。資本主義的な市場経済では、価格メカニズムを利用して、剰余価値は各資本に均等に分配されるように調整される。言い換えれば、より多くの労働者を雇用した資本がより多くの利潤を取得するのではなく、投資額に応じて均等に利潤を配分するように作用する。これは、資本相互の市場の競争の結果でもある。

この平均利潤は、ある種の「理想的状態」であって、より高い利潤率が得られると予想される分野に資本は投資先を変更するように投資戦略を調整する。この調整は無限に続く過程であって、最大限利潤を追求する資本相互の競争の結果として利潤の平準化をもたらすであろうというだけのことであって、現実のある時点をとれば、より高い利潤を獲得できる資本もあれば、平均利潤はおろか利潤そのものも得られず赤字を出す資本もあるが、一定期間をとれば、平均的な利潤とみなしうるような利潤の水準を想定することに意味がないというわけではない。この一般的な利潤率の水準は、一国の経済全体が挙げうる利潤率の水準であり、同時に、この国が労働に基づいて取得する剰余労働の水準を示す指標であるとみてよいだろう。

資本相互の競争のない、単純な市場のばあい、商品の価格は投下労働量にほぼ比例するような価格水準となることが想定されうるし、各産業部門の技術的な条件から各部門がそれぞれ異なる剰余労働を取得することがあってもそれを調整しないような経済や、社会全体が生み出した剰余を資本の競争とは別の原理で配分する経済があってもよいが、こうした経済は資本主義的な市場経済の原理では成立しがたい。

資本主義的市場経済は、市場のメカニズム（商品売買と貨幣の機能）に基づくとはいえ、資本主義に固有の市場の調整メカニズムが組み込まれる結果として、近代以前の市場経済のメカニズムそのものが維持されるわけではなく、市場のメカニズムを資本主義的に構造変容させる。

最後に、流通の位置づけについて述べておく。市場経済が社会の経済としての機能を果たすことができるためには、生産された商品を消費者の市場にもたらし、消費者による商品の選択のための場所（店舗やネットのウェブ）を提供する活動が不可欠である。この活動は生産のような意味での物を生み出す行為ではないが、別の意味で物を生み出す行為である。

流通は、商品の場所の移動を伴う運輸であれば、経済空間に新たな商品がもたらされ、地理空間の変容をもたらす。ある場所に新たにコンビニの店舗ができ、そこに商品が搬送されることで、その場所がもっていた経済空間としての機能は変容する。この「変容」に関わる労働であるといういみで、あらたな経済空間の形成と不可分である。店舗での販売もまた、こうした意味での経済空間の形成を伴うが、それだけでなく、流通過程の目的が買い手を見出し商品の販売を実現することにあるから、商品の価格と使用価値を買い手に情報として発信し、買い手が商品についての価格情報を受け取るだけでなく、商品の使用価値のイメージを形成し、さらには買い手の生活イメージを構築することによって買い手の生活空間の意味に変容をもたらそうとする。

すでに述べたように、商品の買い手は一般的等価物としての貨幣（どのような商品も貨幣量の範囲内で購買する力をもつ特殊な商品）の所有者として、売買の意思決定で主導権をもつから、売り手は、この主導権を自分の商品に対して行使するように、情報を発信する。（実際の商品の使用価値と多かれ少なかれ「ずれ」をもつ）需要とは買い手の欲望の生成であり、この生成を売り手は、売り手相互の競争を前提しながら、売り手による商品情報の形成を通じて、コントロールしようとする。この意味で流通は、市場経済における情報の生産過程であり、流通労働はこのような市場のメカニズムのなかで、買い手との間のコミュニケーション労働を担う。情報化社会としての資本主義は、古典派や20世紀初頭までに形成されてきた経済学が軽視してきた情報やコミュニケーションが労働としての役割を担う社会であり、この点で流通もまた資本主義的な富の形成の場となる。

古典的な経済の構造では、物の生産に用いられる技術と、流通の技術は完全に分離されていた。家を建設するときに用いられる大工道具は家を販売するときに用いられる宣伝や広告などの営業活動では必須の手段ではない。19世紀の産業革命は、産業にかかわらず蒸気機関という汎用的な動力機関を普及させることによって、全産業の工業化（このなかには交通手段も含まれるが）をもたらした。これに対して、20世紀の産業革命の中核となったコンピュータは、生産、流通、消費のすべての現場を通じて汎用的に機能する手段となり、生産と流通を分離する技術的基盤を突き崩した。その結果、市場経済は流過程と生産過程の融合に向かう。商品としての物の生産は、物理的な意味では生産過程で完結するが、商品の使用価値の生産はここで終わるわけではない。流過程は単なる物の移動の過程ではなく、商品の使用価値情報を形成する必須の過程となり、使用価値の生産は流過程でも継続される。コンピュータ化は、このような意味での使用価値の生産を担う技術的基盤をなす。この意味で流過程の生産過程化が進んだといっている。^{*1}

*1 経済学は、労働を新たな物の創造に関与する行為であればあるほどその意義を高く評価しようとしてきた歴史がある。たとえば、古典派経済学に先立って登場した重農主義者と呼ばれる学派は、農業を工業と比べて生産的な産業とみなした。工業はすでにある原料（自然素材）を加工するだけであって新たに何かを創造するわけではないのに対して、農業は自然に働きかけて、新たな生産物を自然から創出する行為であると考えた。古典派は、工業もまた新たな物の生産であると考えて、工業的な労働（物質的生産の労働）を商業やサービス業などと比べて意義のある労働とみなした。マルクスもまた、この古典派の認識を継承して、剰余労働を物的生産過程に固有のもののみならず傾向が強い。したがって流通を担う労働は、物質的生産労働のように剰余労働を含まないと考えた。他方で、重農主義とともに古典派に先行する学派に重商主義学派があるが、この学派は社会の富を商業がもたらす貨幣（金）に求めた。19世紀から20世紀にかけて、経済学説の主流は、いわゆる近代経済学（ミクロ経済学とマクロ経済学）になるが、近

12.2.1 資本蓄積とは

次のような記号を使って資本の運動を説明したい。

商品 W 生産された商品 W'

貨幣 G 売上で得た貨幣 G'

<労働力> A

生産手段 Pm

生産過程 -P-

貨幣を<労働力>と生産手段(機械や原料)に投資して商品を生産する産業資本は次のようなプロセスをとる。

$$G \rightarrow (A + Pm) \xrightarrow{-P-} W' \rightarrow G' \cdot G \rightarrow (A + Pm) \xrightarrow{-P-} W' \rightarrow G' \cdot G \rightarrow (A + Pm) \xrightarrow{-P-} W' \rightarrow G'$$

マルクスは次のように述べている。

生産過程は、それがどのような社会的形態をとろうとも、連続的なものでなければならない。すなわち、同一のステップを周期的に、たえず新たに通過しなくてはならない。ある社会が消費をやめるといふことがありえないように、生産をやめるといふこともまたありえない。したがって、恒常的な連関と、絶え間ない更新の流れのなかで観察するならば、あらゆる社会的生産過程は同時に再生産過程でもある。

生産の条件は同時に再生産の条件でもある。いかなる社会も、その生産物の一部をたえず生産手段ないしは新たな生産の要素に変容させることなしには、生産を継続することは、すなわち再生産をすることはできない。ある社会が自らの富を同じ規模で再生産ないし維持できるためには、他の事情が同じであるとすれば、たとえば一年間に消費した生産手段、すなわち労働手段、原料、補助原料などを同じ分量の新しい現物で補填するほかはない。そしてその補填物は一年間の生産量から切り離され、新たに生産過程に取り込まれていく。つまり、年間生産物のうちのある一定量は生産のためのものなのである。それは初めから生産的消費のためのものであり、大部分は、個人的消費の対象とならない現物形態で存在している。^{*2}

上に引用した「再生産」の条件は、資本主義経済だけでなく一般的に社会の経済が持続するための条件といえる。資本主義経済はこの条件に加えて、この再生産の継続を資本が担うことに由来する固有の条件が必要になる。

「資本主義的生産様式においては、労働過程は価値増殖過程の一手段としてのみ現れる。同じように再生産も、前貸した価値を資本として、すなわち自己増殖する価値として再生産するための一手段としてのみ現れる。(略)たとえば前貸された100ポンドの貨幣額が、今年、資本に変容して20ポンドの剰余価値を生産したとすれば、それは来年も、その次の年も同じ作用を反復するのでなければならない。剰余価値は、資本価値の定期的な増加、あるいは活動する資本がもたらす定期的な収穫として、資本から発生する一種の定期収入の形態をとる。

代経済学では富の源泉を企業活動(資本)にもとめ、労働は資本にとってのコストとしての位置づけとされた。このように、経済学が労働に与える位置づけは、時代によって、学説によって異なる。

*2 『資本論』第一巻第21章「単純な再生産」

資本が投資 利潤とともに投資した資金の回収 再度の投資を繰り返すことを資本の再生産と呼ぶが、この過程で取得した利潤（剰余価値）を全額資本家が私的に消費するか私的消費と貯蓄に回して、再度の投資の規模が不変であるばあいを単純再生産とよび、利潤を投資に回して、投資の規模を拡大させる場合を拡大再生産と呼ぶ。

このいずれの場合であっても、再生産が可能であるための条件がある。

- 資本の活動を継続するために必要な生産手段が繰り返し供給されなければならない。
- 労働者が＜労働力＞を再生産するために必要とする生活必需品が繰り返し供給されなければならない。

この二つの条件は必須の条件であり、社会の圧倒的多数の人口の生存と経済の継続を支える最低限の条件である。これに対して、利潤（剰余価値）については、それを何に用いるかについては上で述べたように、いくつかの選択肢がある。

- 資本家の私的消費。これはゼロにすることはできない。
- 投資資金
- 将来の投資のための貯蓄
- 上記三つの組み合わせ

一般に、利潤の一部が投資に回される場合、再生産は拡大再生産となり、利潤がすべて投資以外の上記のどれかに回される場合は再生産は単純再生産となる。

12.2.2 創業者の労働と再生産

資本家が最初に起業し、資金を生産手段と＜労働力＞に投資するためには、資本家は一定の資金をあらかじめ蓄積していなければならない。この最初の資金はどのようにして蓄積されることになるのか？最初の投資資金の起源は様々であろうが、それが将来資本家になる労働者（労働者のなかのごくわずかが成し遂げる立身出世物語であろう）が苦勞して投資のための資金を貯めるという場合も少なくない。この創業者の苦勞が資本主義では成功物語の典型的なモデルである。

この創業者の資金は、資本による再生産過程のなかで継続して維持されるわけではなく、労働者の労働による成果に置き換わってゆく。

1000 ポンドの資本で定期的に、たとえば年ごとに生み出される剰余価値が 200 ポンドであったとし、この剰余価値が毎年消費されるとしよう。この過程を 5 年反復すれば、消費された剰余価値の総額は 5×200 となり、もともとの前貸しされた 1000 ポンドの資本価値と同額になることは明白である。毎年の剰余価値のうち一部だけが、たとえば半分だけが消費されれば $10 \times 100 = 1000$ であるから、この生産過程が 10 年間反復されたあとに同じ結果が生じるだろう。一般的には、前貸しした資本価値を毎年消費される剰余価値で割った答えが、もともとの前貸しされた資本が資本家によって消費され、すなわち消え失せるまでにかかる年数ないしは生産期間の回数にあたる。資本家としては、自分は他者の不払い労働（剰余労働のこと）の生産物、すなわち剰余価値を消費し、もともとの資本価値は保持していると考えられるかもしれないが、それで事実が少しでも変わることは絶対にない。ある一定の年数が経過後、資本家によって保有されている資本価値は、同じ年数のあいだに等価物を与えることなしに取得された剰余価値の総額に等しく、資本家によって消費された価値総額は、もともとの資本価値に等しい。（略）したがって、すべての蓄積から目を転じたとしても、生産過程のたんなる継続ないし単純な再生産

は、遅かれ早かれ一定期間の後に、すべての資本を必然的に蓄積された資本へと、あるいは資本化された剰余価値へと変容させる。たとえそれが、最初に生産過程に入ってきたときには使用者の個人的に作り上げた財産であったとしても、それは早晩、等価物を与えることなしに取得された価値、あるいは、貨幣形態をとるか否かは別として、他者の不払い労働の具現物となる。

上で指摘されていることは、次のようなことだ。毎年労働者が 200 ポンドの剰余労働に基づく利潤を生み出すとすると、5 年間で 1000 ポンドとなる。創業資本家が当初、自分の労働によって 1000 ポンドを投資資金として用意したとしても、この創業資金は 5 年間ですべて労働者の剰余労働がもたらす 1000 ポンドによって取り戻すことになる。資本家が当初の労働によって資金を蓄積した苦勞は事実であったとしても、この苦勞の果実が未来永劫継続するわけではない。あくまでこの創業資金は過去の行われた労働の成果であり、資本の再生産過程は、この過去の労働の成果を、今投入されている労働が形成する新たな価値で置き換えてゆく。

创业者の立身出世の物語は、資本の再生産の上記の観点からすれば、理論的に根拠のあることとはいえない。資本が何年、何十年と継続して再生産される基本的な動力は今現在の労働者の労働によって形成される新たな価値（可変資本と剰余価値）と、この価値形成過程が同時に遂行することになる生産手段の生産物への価値移転によって担われており、この過程を通じて、创业者の投資資金は消費される。言い換えれば、创业者の投資資金が持続的な資金として維持されているのは、创业者の労働に基づいているわけではない、ということである。

たとえば、2000 万円を貯蓄して住宅を購入する場合と、2000 万円の資金で労働者を雇用し、建築資材などに投資して住宅を建設して販売する会社を立ち上げる場合を比べてみよう両方とも住宅建設に労働が投じられているという点では変わりはない。しかし、前者は、2000 万円が住宅となり、この住宅を自分が住む家として自分で消費してしまい、2000 万円は戻ってこない。

後者は、建設した住宅が販売できれば利潤を伴って当初の投資者の手元に資金が還流する。この住宅の販売で取得した 2000 万円のなかには、投資者の資本によって雇用された労働者が住宅の建設で新たに投入した労働が含まれており、すべてが投資者の過去の汗の結晶というわけではない。もし、すべてが投資者の過去の労働に根拠をもつのだとすれば、住宅を建設するという労働はまったく評価されないことになる。

12.2.3 <労働力>の再生産

経済の機能は、社会が必要とするモノの再生産を通じて人々の生活（生存）を維持することにあるが、資本主義はこの機能を資本の組織を通じて実現するが、この資本の組織には、<労働力>を商品として売る社会集団＝労働者階級が組み込まれなければならない。したがって、資本の再生産は同時に、この資本の構成要素でもある<労働力>の再生産と不可分である。しかも、この<労働力>によって資本は剰余価値を取得することになるのだから、<労働力>再生産は資本の再生産にとって重要な条件をなしている。

資本家が彼の資本の一部を労働力に置き換えると、彼はそれによって彼の全資本を増殖させる。これは資本家にとっては一石二鳥である。資本家は、自分が労働者から受け取るものから利益を受けるだけではない。自分（資本家）が労働者に与えるものからも利益を受けるのである。労働力と引きかえに渡された資本（労働者に支払われた賃金）は生活手段に変容する。この生活手段の消費は、現在いる労働者の筋肉、神経、骨、頭脳を再生産し、新しい労働者を産出するのに役立つ。したがって絶対的に必要なものの範囲内では、労働者階級の個人的消費は、労働力と引きかえに資本から渡された生活手段が、試補によって新たに搾取できる（剰余労働を取得できる）労働力に再変容することにほかならない。それは、資本家にとってもっとも不可欠な生産手段である労働者の生産であり、再生産である。したがっ

て労働者の個人的消費は、それが作業場、工場等の内部でおこなわれようが外部でおこなわれようが、また労働過程の内部でおこなわれようが外部で行われようが資本の生産と再生産の一要因であることに変わりはない。(略)

労働者階級の絶えざる維持と再生産は、資本の再生産のための絶えざる条件でありつづける。資本家は、この条件の充足を労働者の自己保存本能と生殖本能に安心して任せておける。資本家が気を配るのは、労働者の個人的消費を可能なかぎり必要最小限に抑えることである。

再生産という観点からみれば、資本が継続的に維持される前提として、労働市場に<労働力>が恒常的に供給される構造が不可欠である。言い換えれば、賃金によって生活を支える以外に生存を維持する方法をもたない人たちが社会の人口の大量として存在し続けることが必要だということである。この意味で、資本の再生産過程は、単に、生産手段や消費手段といった経済に必要なモノの持続的な供給だけを意味するのではなく、経済構造そのものの再生産であり、この経済構造の基本となる階級関係の再生産でもある。この意味で資本の再生産は同時に資本主義社会の経済が必要とする人間関係の再生産をも意味している。

12.2.4 階級構造の再生産と「人間」について

資本主義経済を説明する際に、これまでも資本家とか労働者という言い回しを用いてきた。これは<労働力>の売買を基礎に、<労働力>の買い手を資本家、売り手を労働者とみなすことを意味している。労働経済などで用いられる「労使関係」という場合も、おおむねこの雇う者と雇われる者の関係を意味している。社長と社員の関係のようにイメージしやすい反面、資本が巨大化し、資本内部の指揮命令組織が階層化され、中間管理職の存在や、正規雇用の労働者と非正規(パートやアルバイトなど)の労働者のように、労働者といっても一括りにできない複雑な様相を呈すると、資本家とは誰のことか、誰が典型的な労働者なのか、といった問題が生じてくる。

資本家-労働者という階級関係は、労働者の労働が剰余労働の形成と結びつくから、この階級関係が複雑な階層的な組織のなかでどのように理解されるべきかは、労働価値説にとって重要なテーマである。

人間は様々な役割をになっているので、階級関係はその役割を市場経済との関わりで切り取って見ているにすぎない。資本家や労働者が家族関係のなかで、夫や妻などの役割を担っているときもまた資本家あるいは労働者であるといえるかどうかはケースバイケースであろう。また、働いている時の役割が資本家としての役割なのか労働者としての役割なのか明確ではないケースも様々考えられる。パートの労働者が店舗で顧客にたいして商品売り込む場合、彼/彼女はあたかも企業の経営者であるかのようにして製品の良さをアピールするかもしれない。中間管理職は、上司との関係でいえば、指揮命令に従うことになるが、部下に対しては経営者の意思を体現する者としての役割を担う。

資本の生産過程は、個々の労働者が別々に労働するのではなく、分業関係を通じて相互に有機的な連携をもちながら働く集合的な労働による。したがって、剰余労働も、こうした集合的な労働の成果であり、それを個々の労働者に分割して把握することはできない。^{*3}古典派などの経済学では、こうした資本内部の人間関係の複雑化は想定していなかった。たとえば、産業資本の労働者の労働は主として生産の現場の労働であり、資本家は生産された商品の販売をになうとされ、販売労働を資本家的な労働と位置づける考え方がマルクスなどにも受け継がれたが、これはその後の資本主義経済の発展のなかでは有効な考え方とはいえない。むしろ、組織の巨大化にともなって、資本家的な労働と労働者の労働の境界は曖昧化し、組織が一体となって剰余労働の

^{*3} 私はあたかも個々の労働者が剰余労働を行うような具体例を挙げているので誤解されないようにしてほしい。

形成の有機体となるような側面が見出される。この意味で階級関係を個々の個人の集合としての人間集団を資本家集団と労働者集団に分類することは必ずしも妥当なこととはいえない。むしろ階級関係は、個人の分類に基づくのではなく、資本が果たす価値増殖の構造を示すものとみなすべきであろう。

資本の再生産 = 蓄積は、資本主義的な経済構造の再生産である。構造が再生産されればよいのだから、個々の人間の再生産が時には犠牲にされることがありうる。〈労働力〉が機械に置き換えられたり、別の〈労働力〉に替えられて失業することで、その当該の労働者は生活の困難に直面する。こうした個々の人間が直面する困難と構造的な再生産とは両立するし、個々の人間の困難や犠牲によってでも構造的な再生産を維持しようとするメカニズムが制度には働く。社会の制度を考えると、私たちは、制度の維持と人間の生存の保障を同じことのようにみなしがちだが、そうではない。多くの場合、制度（構造）の維持のために個々の人間の生存が犠牲にされてきた。こうした犠牲を最小にするような制度のあり方がどのようであればならないのか、資本主義という経済制度はこの点で果たしてベストなのか、という問題意識を忘れてはならないだろう。